

連載

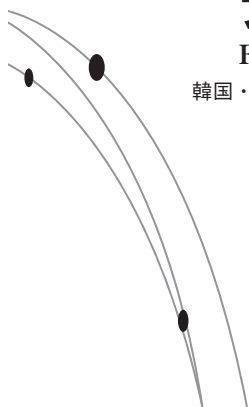
フィールド・アイ

Field Eye

韓国・シンガポール・中国から——①

茨城大学 笹野美佐恵

Misae Sasano



アジヤ3都市における成人への移行の袋小路

——「スペックの塔」を登り続ける韓国の若者たち

1 はじめに

シンガポールの街を歩くと、どこにいても韓国カルチャーの存在感に圧倒される。K-POPが流れ、Kビューティーの広告が並び、スーパーにはKフードが所狭しと並ぶ。外から見れば、韓国は文化輸出の成功例として輝いて見えるだろう。だが、実際にその物語を支える韓国に住む若者たちは、その眩しさとは対照的に、息をつく暇もない過熱する競争社会の中を生きている。

本連載では、筆者が大学院生時代を過ごした韓国・ソウル、現在客員研究員として滞在しているシンガポール、そして次に滞在を予定している中国・北京というアジヤ3都市をフィールドに、「学校→就業→家族形成」という「成人への移行(Transition to Adulthood)」が、アジヤ地域でなぜこれほどまでに目詰まりしているのかを考えていきたい。

アジヤ地域では晩婚化・非婚化が急速に進み、出生率は世界最低水準に落ち込んでいる。韓国の合計特殊出生率は0.80、シンガポールは0.87、中国は0.98と報じられており(2025年の値¹⁾)、いずれも「1」を切る深刻な少子化である。

第1回目は、私の原点とも言える韓国の現場から見ていきたい。

2 就学——「夜の図書館」に象徴される終わりのなきスペック競争

ソウル大学校の大学院生時代、私が最も衝撃を受け

たのは、学生寮の食堂が夜になると「図書館」に変貌する光景だった。夕食が終わると、テーブルには参考書やノートPCが並び、深夜になっても席は埋まったまま。キャンパス内には24時間開館している図書館もあり、夜遅くまで明かりが消えることはない。

厳しい受験戦争を勝ち抜いた学生たちに大学入学後の「余白」はほとんどない。日本の大学生がアルバイトやサークル活動に時間を割くのとは対照的に、韓国の学生は「スペック(Spec)」と呼ばれる履歴書の項目を磨き続ける。英語はもちろん、第2・第3外国語、資格、インターン、ボランティアなど、積み上げるべき項目は尽きない。美容整形が広く行われている背景にも、「見た目」さえ競争の対象となる社会構造がある。

筆者が法律事務所では日本語を教えていた頃、ソウル大出身のエリートたちは口をそろえて「青春時代の記憶がない」と語っていた。放課後のクラブ活動がほとんど存在しない韓国では、学生時代の思い出は勉強一色になりやすい。さらに、教育競争は家庭の経済力とも密接に結びつくため、子どもの数が減るほど1人あたりの教育投資は厚くなり、競争はむしろ激化する。

現在、韓国では中学・高校受験が廃止されているが、それが皮肉にも大学入試までの競争を長期化させている。なぜなら、大学入試までアスピレーションが冷却する機会がないからだ。ソウル大の学生からは「高校時代の塾・家庭教師代は月200万〜300万ウォンだった」という話をよく聞いた。日本と同様、公的な教育支出が薄い韓国では、親の支援が子供の教育達成に不可欠であり、母親たちも常に子どもの成績をめぐり、他者との比較にさらされる。韓国には「オムチナ(엄친아, 『母の友達の息子』の意)²⁾」という口語的な略語がある。これは、就学・就業・家族形成の各段階で、常に自分より優秀で親孝行な「誰かの息子」と比較される韓国の若者の現状を象徴する言葉である。

3 就業——首都ソウルと大企業に集中する「狭すぎる入り口」

学力競争が過熱する理由は明快だ。若者が奪い合う「大企業・公務員」という第一次労働市場の椅子が極端に少ないうえ、その待遇差が決定的だからである。大企業であっても定年まで勤め上げることが難しい昨今、高給で安定した職業の中でも、とりわけ医師が若者にとって就きたい職業の首位を独占している。

韓国には日本のような「新卒一括採用」制度がない。そのため若者は「就職準備生」として滞留しながら、企業が求めるスペックを自ら積み上げ、就職試験に挑み続けることとなる。韓国経営者総協会（KEF）の2022年報告によれば、大企業（300人以上）の賃金を100とした場合、中小企業（10～99人）はわずか57.7%にとどまる。この格差は福利厚生まで含めればさらに拡大し、最初の入り口でつまずくと敗者復活は極めて難しい。

そのため若者は、卒業を延期してでもスペックを積み上げようとする。大学生の休学や語学研修はすでに一般化しており、たとえば米国の留学生数（国別）では、2023-2024年度に韓国は人口約5000万人でありながら、インド、中国に次いで第3位に位置づけられている（IIE, *Open Doors Report 2024*）。就業という入り口の関門があまりにも高く設定されているため、若者は成人期への移行の第一段階で膨大な時間とエネルギーを費やし、20代の多くをその準備に捧げることとなる。

4 家族形成——アパート文化とSNSが生む「可視化された序列」

学校、就業と続く過酷な競争の次には、移行の最終段階である「家族形成」をめぐる競争が待ち受けている。東アジアでは婚外子が少なく、出産は結婚と強く結びついているため、結婚が難しくなれば出産も減る。そのため、学校—就業—結婚—出産という移行のどこかで行き詰まると、その後の移行も連鎖的に詰まってしまう。

韓国の合計特殊出生率が0.72（2023年）という、人類未踏の世界最低水準を記録した背景には、家族形成そのものが比較可能な「スペック競争」の最終ステージになってしまった現実がある。その象徴が「アパート³⁾文化」だ。韓国の画一的なアパート群は、居住地域やブランド、棟番号から坪数や資産価値が推測されやすく、隣人との経済格差を可視化し、比較を容易にする装置として機能している。韓国では結婚に際して親が住宅購入を補助する規範が強いため、どのエリアにどの規模の住まいを用意できるかという「可視化された序列」が、結婚生活のスタートから突きつけられている。

近年はSNSがその傾向に拍車をかけている。プロポーズという私的な瞬間でさえ「Kプロポーズ」と

呼ばれるホテルの高額パッケージ商品として消費され、他者からの「いいね」の承認を求めるためのライフイベントとなっている。このように「目指すべき生活水準」が極限まで引き上げられた結果、結婚は温かな目標ではなく、他者との比較イベントへと変質してしまった。

5 結び——過剰適応の果ての袋小路

生まれてから結婚に至るまで、すべてのライフステージが過剰な比較の対象となる、このような逃げ場のない息苦しさは、若者が自国を「ヘル（地獄）朝鮮」と呼ぶ背景になっている。住宅、貯蓄、職の安定、親の支援。求められる条件が揃わなければ、次の段階へ進めない。結果、結婚は先送りされ、非婚化が進み、それに伴い出生数は減り続ける。

Kカルチャーの成功は、韓国社会の「光」だ。しかしその光の内側には、教育、就業、家族形成の各段階で、比較が常に若者を圧迫し、追い立てる構造がある。韓国社会は、社会が提示した熾烈な競争的社会構造に各家族が過剰適応した結果、「漢江の奇跡」と呼ばれる経済的成功を収めたものの、その副作用として家族形成が極めて困難になり、少子化が深刻化している。それでは、国家が教育制度をより「効率的」に管理し、移行を滑らかに設計したシンガポールでは、若者はこの袋小路を抜け出せているのだろうか。次号では、管理されたメリトクラシーの現場を歩きながら考えていきたい。

1) 韓国は韓国統計庁速報値、シンガポールは2025年の居住者ベースの合計特殊出生率（暫定値）、中国は国家统计局の出生人口・粗出生率に基づく報道上の推計値（0.97～0.98）に依拠した。

2) 「オムチナ（엄친아）」は、「엄마（母）・친구（友達）・아들（息子）」の語頭を取った韓国語の口語的略語である。親同士のネットワークを通じて提示される「理想的他者」を指し、若者が経験する他者比較や競争の圧力を象徴する表現である。

3) 韓国語の「アパート」は、日本の「アパート（木造・軽量鉄骨）」とは異なり、主に高層の鉄筋コンクリート造（日本の「マンション」に相当）を指す。日本のアパート（木造等）のような低層住宅は、主に「ヴィラ」と呼ばれ区別される。

ささの・みさえ 茨城大学人文社会科学部講師。主な論文に“Diversity in Transitions to Adulthood: Role Structures and Gender Role Attitudes among Youth across Seven Countries,” *Journal of Asian Sociology*, Vol. 53, No. 4, pp. 421-447（2024年）など。家族社会学、人口学、ジェンダー研究専攻。